

東アジア四千年の永続農業

中国・朝鮮・日本 (上) (下)

F. H. King 著／杉本俊朗(横浜国立大学名誉教授) 訳

【解説2】

“アジア的ルネッサンス”に向けた未来展望への確かな示唆

——キングの旅にみる文明的な出会いと発見

古沢広祐

明治四十二年（一九〇九年）、F・H・キングが見た極東アジア（中国、朝鮮、日本）の農業、農村とは、いわば西欧近代化の波を受け始めながらもそれ以前の伝統社会の姿を色濃く残した世界であった。それは“アメリカ的文明”いわゆる新大陸型社会の側からの人間が、“アジア的文明”ないし旧大陸型社会と出会ったことを意味している。キングは、この地で連綿と営まれ続けてきた土地と自然を巧みに利用する英知や人々の努力に驚き、その様子を印象深く書き記している。

本書は、いわば文明的な出会いの書とでもいえるべき内容を色濃く帯びた書物といっていだらう。とりわけ農業という営みは、Agri-cultureと記されているように、「Cultivate：耕す」と深く結びついており、人々の営みの中でもとくに大地との交わりとして古い歴史を刻んできたものである。農業そして食の在り方には、その文明の本質が投影されているとみることができる。農の営みに関して、いわゆる旧大陸のアジア的世界とフロンティア国家のアメリカ的世界とでは、よって立つ土台が大きく異なる。

アメリカの地に生まれ、新天地を開拓して繁栄を謳歌する国で育ったキングだったが、土壌学者として土地の永続的な管理と利用という視点から、収奪するかのように土地を思いのまま利用しつくすアメリカ農業の在り方に対して、批判的な視座をもつに至ったと思われる。その視座が、太平洋を渡って旧大陸のアジア世界に出会うことで、そこに内在してきた永続的な農業形態に新鮮な光を与えることになった。農の営みに、まさしく文明的な本質が投影されていたことを、キングは新鮮な驚きとともに見出したのである。

1. 文明的な出会いの旅 ——農にみるアジア的世界

振り返れば、およそ一万年前から始まったとされる農耕の成立とともに、世界各地で古

代文明が形成された。人類は、文明形成の基礎に、自然を馴化する有力な手段として作物や家畜を生み出し、安定した生存基盤を確立するとともに、余剰食糧を確保して多彩な文化を花開かせてきた。地域的に多種多彩に展開された諸文化と、限定された地域範囲を越えて文化統合と大規模な組織編成の下に形成された諸文明は、各地で交流と対立、統合を重ねていった。中国そして東アジアは、そうした文明のうちの一極を担う存在である。

いうまでもなく、統合と再編過程で大きな力を発揮したのが農業（食料生産システム）である。たとえばわが国において、縄文文化から弥生文化への移行過程で水田稲作の果たした役割などが典型例であろう。それは単なる生産技術にとどまらず、土地の合理的な利用、継続的な管理や調整を含んだ総合的な力を背景にしたものであった。

現代につながる歴史の動きを大局的に見れば、中世から近代へと推移し、十五世紀の大航海時代以降、世界は西洋化の流れの中で一体化に向かう再編が行われてきた。その後の世界統合過程においては、西洋地域で進行した科学革命（近代科学の形成と発展）と農業革命（農法の革新と食料生産技術の発展）が、世界システムの展開を支える大きな根幹を形作っていった。とくにアメリカ大陸では、二十世紀以降の大繁栄の拠点として浮上するフロンティア国家「アメリカ」が、新しい生命体のごとく発展の道を歩んでいく。その繁栄の源は、元をたどれば技術や文化などの多くがヨーロッパから持ち込まれたものであったが、ちょうど外来の帰化植物が、新天地でかつての制約条件から解放されて大繁栄するごとく、無制限といってよいほどの豊富な土地や資源を利用して、アメリカは溢れんばかりの物質文明を花開かせたのだった。

というのも、本家のヨーロッパ世界では、一種の社会制御的な力（規範、道徳、批判哲学、思想など）が力を持ち続けており、手放しの欲望の解放や物質文明の謳歌については、一定程度の抑えが働いていたと考えられる。アメリカという新天地の中でこそ技術至上主義や実利主義といった要素を強くもつアメリカ的物質文明が花開いたのである。そして、自由な市場の拡大と相まって、世界中に影響力を発揮していく「アメリカ文明」の拠点として君臨していくのである。いわゆる無限拡大的なフロンティア開発志向が、農業形態においても色濃く反映しており、一種使い捨て的な収奪的土地利用や土壌管理が行われてきたのだった。

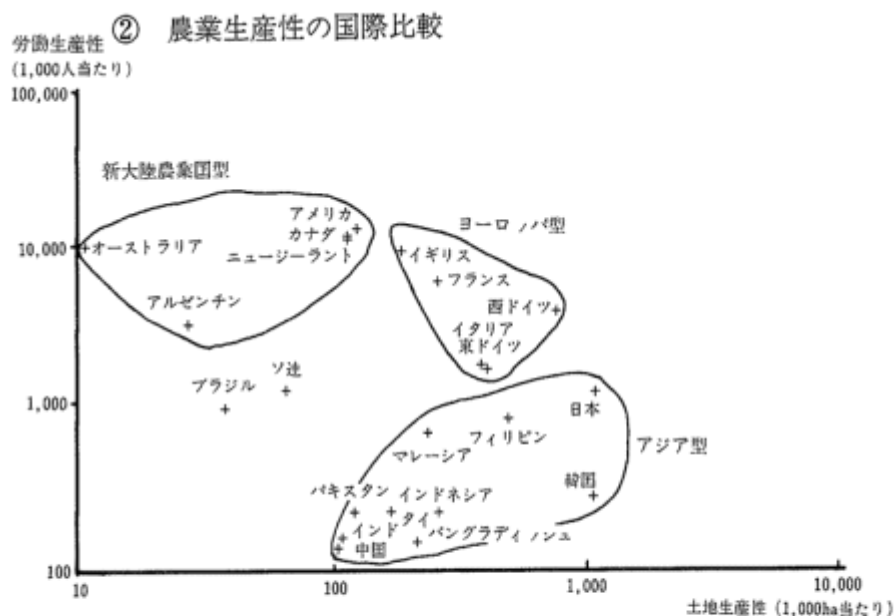
その意味でもキングの旅は、いわばアメリカ文明を問い直す視点を含んだ意義深いものであった。

2. アジア型農業と新大陸型農業

以上のような歴史的な意味あいとともに、地勢的ないし地理的な視点からも、新大陸アメリカとの対比でアジア地域の特性をとらえることができる。ただし、アジアと一口に言っても、東、東南、南、中東地域などでの差違は非常に大きい。東南・東アジア地域だけ見ても、例えば島嶼地域と大陸地域とでは、文化・生業形態・交易圏などで大きく異なる。ここでは、そうした差違にはふれずに、かなり抽象レベルに立ってとくに農業形態の側面

から地勢的特徴についてみていく。

図1 農業生産性の国際比較（「経済白書」1987年版より）



- (備考) 1. 両軸とも対数目盛。
 2. FAO「FOOD BALANCE SHEET, 1979—81 AVERAGE」,
 「PRODUCTION YEARBOOK」1975, 85年版により作成。
 3. 生産性は、FAOの作物別ウエイト(1961~65年基準,小麦千t=100)により
 統合した各国の農業生産(小麦単位表示)を各投入要素で除したものとした。

世界の農業・食料生産の形態については、とくに土地利用形態から、アジア型農業、欧州型農業、新大陸型農業の三つのタイプに類型化することができる(図1)。図の見方としては、縦軸は、平たくいえば経営面積の広さを意味し、横軸は耕地への労働投入の割合(手間をかけた耕作)と考えるとわかりやすい。すなわち、左上の新大陸型農業とは、アメリカやブラジル、オーストラリアなどで見られるように、一人が何百haという広大な農地を粗放的に経営する農業形態である。他方、アジア型農業とは、狭い土地を丹念に耕しながら(概ね1ha以下)古くから多数の人口を養い文化的蓄積を重ねてきた農業形態である。その意味では、欧州型は中間に位置している。

新大陸型は、植民地的色彩と無限拡大が可能であるかのようなフロンティア的性格をそなえ、モノカルチャー(単一栽培)型で輸出商品生産という特徴をもつ。アジア型は、どちらかといえば自給的な側面を保持しており、多数の品目を複合栽培(土地の多面的利用)する性格をもっている。これはあくまで概況把握であり、アジアにおいても細かくはタイやベトナムのようにコメのモノカルチャー・輸出志向の強い農業形態(新開拓地域)も含まれてはいる。

こうした区分けを前提に、時代状況的には、伝統アジア型からフロンティア拡大志向をもった新大陸型の農業が、世界をリードする主役に浮上してきたのが現代である。アジア地域自体も、グローバル化の影響下でフロンティア型へと変質を迫られてきた。しかし、環境問題の深刻化など長期的かつ今日的問題を直視するならば、再度、伝統的特性に立ち戻って時代の方向性を見定めていく新たな視点が重要ではないかと思われる。

その意味でも、キングの著作は意義深い内容をはらんでいる。すなわち、有機農業、持続可能な農業の視点から、伝統的なアジア型農業がもつ可能性に対して光をあてることになるからである。

3. 有機農業の時代を先取りした著作

本書 "Farmers of Forty Centuries or Permanent Agriculture in China, Korea and Japan" (一九一一年、邦訳一九四四年) が刊行された当時、本書はエキゾチックな旅行物語の一冊(土壌学者による視察記)として以上には、今日ほど一般的に重要視されなかったと思われる。農業の近代化が西欧においていち早く進行しだし、広大な農地を粗放的に単一耕作して機械化が発展・普及し始める近代農業の興隆期であり、土壌の疲弊化や土壌劣化は肥料投入(その後の化学肥料の隆盛)により解決されるという近代技術楽観主義の時代に位置していたからである。

十九世紀後半から二十世紀初頭、アメリカは工業力でもイギリスを追い越して世界の座に着いていた(一九〇八年、T型フォード車発売)。農業においても、急速に進められた西部開拓が一段落した時代であり(『大草原の小さな家』の原作者、ローラ・インガルス・ワイルダー、一八六七年生・一九五七年没)、大規模農業が育成され繁栄していく時代であった。すでに無機肥料(リン、カリ)やボルドー液(硫酸銅と生石灰の混合)の利用が行なわれ、農業用の機械が普及しだしていた。当時から土壌侵食の問題は認識されていたが、深刻化したのは一九三〇年代に中西部で頻発したダストボウル(土地の荒廃による砂嵐)においてであった。その様子は、スタインベックの『怒りの葡萄』(一九三九年)において描かれている。

キングが着目した東アジア地域の封建制のなごりを有した遅れた伝統的農業は、異色ではあったがそれ以上のものではなく、農業形態の持続可能性としての特性については、当時の一般の人々にとってそれほど重視される事柄ではなかった。題名にも示されるような中国における四千年間も水田耕作を継続的に営み続けてきた農民たちの存在への驚きが、人々に広く認識され共感を呼ぶようになるのは、公害問題や環境破壊が深刻化しだした一九七〇年代に入ってからのことである。

環境問題や資源問題が本格化しだした一九七〇年代初頭、ローマクラブが警鐘を鳴らしたレポート『成長の限界』(一九七二年)が注目をあつめ、農業においてもレイチェル・カーソンの『沈黙の春』(一九六二年、邦訳一九六四年)による農薬汚染が人々の大きな関心事になりだした時代である。当時、近代農業の問題点をふまえて化学肥料や農薬に依存し

ない有機農業が提唱され実践されだしていく時代である。そこでは、文明発展に関する歴史的な見直しも行なわれて、多くの古代（西欧）文明が過剰耕作などで砂漠化や耕地の劣化を招いて、永続的な耕作の維持が難しかったことの反省なども生まれている。

こうした時代のなかで、本書の存在に注目し、それを再評価して復刻版を出版したのは、米国の有機農業の草分け的普及団体である「ロデル・プレス」であった。復刻版は何度か出されており、私が確認できた初版と思われる本は一九七三年のものである。現在、キングの母校であるウィスコンシン大学には、一九七九年より学生が主体となって組織された「F. H. King Students of Sustainable Agriculture」があり、有機農業や持続可能な農業を普及する活動を行っている（ただし、キング自身は土壌保全の持続性に着目した学者であり、有機農業が提起される前の時代の人間であった点は一言付記しておく）。

二十世紀半ばからそれ以降、有機農業が注目されだした当時をふりかえってみると、たとえば同じようにインドに関係して、有機農業の古典とされる『農業聖典』（A・ハワード著、*Agricultural Testament*、一九四〇年。最初の邦訳は、戸荻義次監修、山路健訳、農林水産業生産性向上会議、一九五九年。絶版後、新訳として、保田茂監訳でコモンズより二〇〇三年刊）という書物が出た経緯がある。著者ハワードは、イギリスの農家に育ち、植物病理、微生物学を学んだ後、インドの農産研究所で長年働いたが、インド在住中に、農薬や化学肥料を使わずに立派な農作物を育てる伝統的農法に注目した。そして、その研究成果と豊富な事例観察に基づいて、手をかけて良質な堆肥づくりを行うインドール式処理法を確立し普及したのだった。イギリスでは、ハワードの影響の下、土壌協会が一九五一年に設立され、その後、近年の欧米各国での有機農業の普及に大きく貢献したのだった。

こうした例をみてわかるのは、環境問題と資源制約に直面しだした現代社会において、アジア型の伝統的農業の特質が再評価されだしている動きが出ていることである。その動きは、従来の新大陸型の大型・粗放・モノカルチャー型農業の問題点をふまえての動きである。歴史的にさかのぼれば、つい最近までは、世界各地でそれぞれの農業形態がそれなりの独自性を保持してある程度は住み分け続けてきたのであった。それが、経済のグローバル化（農業貿易の拡大）の流れによって、相互浸透と市場競争による再編と組み込みが急速に進んだ。それは目先の生産性（化学肥料の投入等）や経済価値評価（価格）だけで、競争力あるものが簡単に他を駆逐していく現象を世界的に引き起こしてきた。

しかし、持続可能性という視点からこうした動きを見直すと、本来的な農業のあり方に関して、無限成長・拡大志向ではない新たな問い直しが浮上し始めているように思われる。あらためて、長期的な視野からの持続可能性の重要性が再認識されだしたのである。本書が注目され、百年近い歳月を越えてふたたび刊行されるようになった意義がそこにある。

4. 持続的循環モデルの原型を見出す

キングが驚き注目した極東の人々の生活様式の特徴に、あらゆるものを無駄にせず使い回していく資源循環の有効利用を徹底している姿があった。今日、「もったいない」：

Mottainai」という言葉が、あらためて提起され世界的に注目され出しているが、キングはあらゆる場面で、この「もったいない」精神の生活行動様式ともいべき事柄に着目して記述している。この言葉の語源は、もとをただせば仏教用語の「物体（もったい）」から来ているとされるが、和製漢語で「勿体無い」として使用され、物の価値が活かされない意味で使われている。物を大事にする人々のライフスタイルと精神の有り様を表しており、それは今日的な言葉でいえば資源循環であるが、広く生命循環を含む循環を尊重する思想として引き継がれてきた。

そもそも私たち人間が生きているということは、周囲と切り離れて自分だけ孤立的に存在しているわけではない。周りの世界とのつながり、空気、水はもちろんのこと、食べ物でいえば、水田とのつながりと、家畜とのつながり、あるいは地域の山々や樹木ともつながっている。栄養源の供給から見ても、漁業や田んぼや畑は元来は林や森林があることで、それらがうまく共存し合う関係（共生的関係）で成り立っていた。そこに永続可能な社会の基盤が築かれていたのである。

産業社会以前の多くの農業社会では、自然の物質循環系と似たようなサイクルを社会の基礎に発展させてきたかにみえる。キングが記載しているように、日本や中国でも人糞尿が回収されて農地へと戻されるような循環サイクルが形成されていた（中国では豚など家畜の介在も多い）。これは、「食」の延長線上に「農」的環境が循環サイクルとして整えられてきたとみることができる。さまざまな循環的利用のなかでも興味深いのが、朝鮮やとくに日本で発展した食・住・衣すべてに関係をもつわら利用の展開であった。わらじ、蓑みの、縄、俵、雪沓、鍋つかみ、壁土の補強材、玩具、そして精神的・宗教的世界の領域のシンボルである神社のしめ縄に至るまで、多種多様なわら工芸品が生活文化用具として利用されてきた。最終的に燃やされた灰までも、染め物、焼き物、洗濯などの補助剤として利用されたり田畑の肥料として還元利用されていた。

こうした循環のさまざまな知恵は、今日の使い捨て社会の中でほとんど見失われてきたかにみえる。しかし、「もったいない」精神の再認識の高まりや、日本政府などが掲げる環境立国としての柱となる「循環型社会の形成」（循環型社会形成推進基本法の制定、二〇〇〇年）にみるように、二十一世紀社会の重要な理念・思想として復活しつつある。キングが着目した、全ての資源を有効利用して無駄なく使いきって廃棄物にならないようにする姿は、たとえば今日「ゼロ・エミッション」という新たな名前を冠して、日本にある国連大学が推進するプロジェクトとしても進展しだしている。そして隣国の韓国や中国においても、深刻化する資源問題や環境問題という課題に対して、同様の環境重視の政策が展開され始めている。

5. 資源・環境の制約下でのアジア的農業・農村のあり方

他方、近年の中国をはじめとする東アジアの経済発展ぶりは著しいものがある。とくに中国は、WTO（世界貿易機関）に加盟して三年後（二〇〇四年）には輸出でも日本を上

回り、ドイツ、アメリカに次ぎ第三位の位置を占め、世界経済のセンター的な位置の一角を占める存在になった。上海など沿岸部の都市では、建設ブームに沸き立ち、不動産や株などの高騰で巨万の富を手にする富豪が多数出現したのだった。こうした状況下、家電製品や自動車などが急速に普及しており、資源・エネルギーの需要は急上昇を続けている。当然のことながら、その反面では、海外からの資源輸入、大量のCO₂等の温室効果ガスの放出、莫大な量の廃棄物の処理など、深刻な問題が生じる事態が懸念されだしている。

食料・農業においても、経済発展にともなう正負の影響がアジア各国で顕在化し始めている。輸出が増大した二〇〇四年の中国は、農産物の輸入においては輸出との差し引きで四七億ドルの赤字に転落した。ちょうど日本の経済発展過程で、工業製品により黒字を稼ぐ一方で、資源や食料の輸入を大幅に増やした経緯と多少とも似た動きをみせている。

中国が食料輸入大国になることへの警戒は、早くから『だれが中国を養うのか？』（レスター・ブラウン著、今村奈良臣訳、一九九五年、ダイヤモンド社）をはじめとして警鐘が鳴らされてきたが、莫大な人口を抱える中国の食料輸入は、国際貿易に大きな影響を与える。二〇〇七年から二〇〇八年にかけて、石油などの資源価格の上昇とともに、国際穀物価格の大幅な上昇という事態が起きたが、中国の食料輸入が増大すれば、世界情勢はさらなる深刻さをはらむことは避けられない。

中国をはじめとするアジア地域での成長拡大路線は当面は続くと思われるが、その一方で、農村社会の安定的維持や、地域の文化、自然環境の保全などを計っていく政策が共通課題として浮かび上がりつつある。世界の半分近い人口を抱え多様な自然生態系と伝統文化を育んできたアジア地域において、フロンティア型の無限成長・拡大主義が今後とも幅を利かせるとしたら、地球の未来は破局に向かわざるをえないのではなかろうか。世界の成長センターの一翼を担う東アジア地域が、将来的にどのような発展の道をたどるかによって世界に大きな影響を及ぼす時代となっているからである。とりわけ中国の今後の動向は気がかりである。

繰り返しになるが、従来の西洋近代化モデルないしアメリカ的物质文明の謳歌（無限成長・拡大路線）とは一線を画した持続可能なアジア型発展モデルというべき道筋を、私たちは見つけ出すことが求められているのである。

まさにその道を見出すための一つの手がかりを、本書『東アジア四千年の永続農業』が与えてくれるのではなかろうか。温故知新という言葉どおり、伝統の中に隠されていた農の営みの知恵にさまざまな角度から光をあて、新しい未来に向けてその英知を復活し再創造する“アジア的ルネッサンス”とでもいえるような未来展望のための示唆を、私たちは本書から数多く学びとることができると思われる。

古沢広祐（ふるさわ・こうゆう）

一九五〇年東京都生れ。大阪大学理学部生物学科卒業。京都大学大学院農学部農学研究

科（農林経済・ 農学原論）課程修了・満期退学。農学博士。目白学園女子短期大学生活科助教授を経て、現在、國學院大學経済学部（経済ネットワーク学科）教授。

【学会、社会活動】日本有機農業学会監事、共生社会システム学会理事、エントロピー学会世話人、日本農業経済学会会員、環境経済・政策学会会員、他。

（特活）「環境・持続社会」研究センター（JACSES）代表理事、（特活）国際協力NGOセンター理事、市民セクター政策機構理事など。

【著書】（単著）『地球文明ビジョン —環境が語る脱成長社会』日本放送出版協会、『共生時代の食と農生産者と消費者を結ぶ』家の光協会、『共生社会の論理 いのちと暮らしの社会経済学』学陽書房、（共著）『安ければ、それでいいのか！？』コモンズ、『環境と人間の経済学』ミネルヴァ書房、『地球 の限界』日科技連出版社、他。